



舞 比 へ

石 見 備 中

2017年1月22日(日)

※駐車場はありません

京都芸術劇場
春秋座ホワイエ 15時30分 開演
(京都造形芸術大学内) (15時開場)

入場料1000円(当日券のみ) ※定員約100名・先着順にご入場いただきます。

学生・高校生以下：入場無料(要証明書提示)

アクセス
京都市左京区北白川瓜生山2-116
市バス3・5・204系統
(上終町京都造形芸大前)下車
叡山電車(茶山駅)下車・徒歩10分

問い合わせ TEL :090-6837-9394 mail:nozomi.hgr@gmail.com (京都瓜生山舞子連中 山田)

主催：京都瓜生山舞子連中

備中神楽

猿田彦の命の舞

赤の鎧に鼻高面、白のシャグマをかぶり、たっつけ袴で腰に刀を差し両手に扇を持って早いテンポで勇ましく舞う。猿田彦の命の神徳にちなんで、諸事の事はじめの悪魔払いとして舞われてきたものである。たっつけ袴の出立ちでの、激しい動きのこの舞は奥州の鬼剣舞に似通った点が多く、修験道の山伏の影響が大きかったのではないかとされる。

事代主の命の舞

童顔の恵比須の面に立烏帽子。釣竿の意味で、竹のすもっとに鯛を取り付けた糸を巻いたものを持つ。「たいたい釣り」と言って人気のある舞で、早いテンポで楽しそうに、軽快に舞う。「今日もまた美保の浜沖静かにていざ船浮けて釣りをせん」

松尾明神の酒造り

酒造りの神様、松尾明神の命が、面白おかしく舞出してくる。太鼓たたきに話しかけ、落語、漫才、歌謡曲、浪曲とふんだんに笑わせる。備中神楽が、唯一の農村娯楽であった頃の様子が伺われる。やがて、数人の助手を呼び出し、米つき歌や、酒造りの歌を歌いあい八千石の酒を製造する舞となっている。



大塚 芳伸

(備中成羽社代表)

備中神楽後継者育成のため、成羽子ども神楽育成会をはじめ、町内の小学校、中学校などで指導、多くの後継者を育てる。また大塚代表の舞う松尾明神は十八番演目として県内外の秋祭り、イベントなどに招待され披露されている。

石見神楽

塩祓い

四方祓いとも言う。神事系の舞で衣装は烏帽子、狩衣で幣と扇を持ち東西南北の四方を舞い清めて、神々を待つ準備を整える神楽。「降りたまえ降り居の庭には綾をしき錦を並べ御座と踏ましようや」神を降ろす歌で、神よ降りたまえ神が降りておいでになる場所には綾を敷き錦を並べ神の御座所といたしましょう。

恵比須

「国を始めて急ぐには。国を始めて急ぐには。四方こそ静かに釣りすなり」美保神社の御祭神で、漁業、商業の祖神として崇拝されている。八重事代主命(恵比須の大神)の鯛釣りの様子を舞ったものである。

大蛇

高天原を追われた須佐之男命は出雲の国、斐の川(斐伊川)にさしかかると、嘆き悲しむ老夫婦と一人の娘に出会い、毎年現れる八岐大蛇に悩まされていることを知る。須佐之男命は、木の実で醸した毒酒を作らせ、やがて黒雲たなびく八岐大蛇が現れ、これを飲んで酔い伏しているところを十束剣をもって見事退治する。ちょうちん蛇胴の考案により、石見神楽に一大改革を起こした。



小林 泰三

(京都瓜生山舞子連中代表)

石見神楽面の製造・販売に携わりながら、神楽面教室やワークショップを企画開催し、次世代育成と地域振興、伝統芸能の普及活動にも取り組んでいる。